

『すべて心に納めて』(ルカの福音書 2章 15～21節) 2020.12.27.

<はじめに> クリスマスを越えて、今年最後の聖日になりました。越年に向かう慌しい営みの中ですが、クリスマスは節季でもありますから、そのストーリーに目を向けて、越年の備えとしても主の語りかけに耳を傾けていただけると幸いです。心に留めたい聖句は19節です。

I これらのことを

①相次ぐ不思議

クリスマス物語は不思議の連続です。天使が現れ、思いもよらないことを告げ、その通りに事が進みます。また、取り巻く人々の思惑によっても、聖家族は翻弄されています。羊飼いや博士の来訪、讚美と預言を語る人たちの言葉も驚くべきものでした。

②語られたことば

「この出来事」(15)「告げられたこと」(17)「話したこと」(18)「これらのこと」(19)は、RHEMA(ギリシャ語)が用いられています(1:37,38,2:51も)。「神のことばに不可能なことは一つもない」(1:37)からクリスマスは始まりました。出来事の背後には神のことばがありました。

③広く深く

個別の出来事も繋げて見ると、法則・傾向を見出せることがあります。科学的な探求と洞察は信仰にも必要です。また、表層現象ばかりに目を留めてはなりません。その背後で語り掛け、働かれる神がおられます。主の御業とみことばを忘れ去ってはなりません。

II すべて心に納めて

①大切なものとして

人の記憶はあいまいです。本当に大切なことには相応の管理をします。マリヤは一連の出来事とその言葉を、価値あるものとして心に銘記しました。ルカはこの福音書の序章をマリヤの証言を基に記しました。それで私たちもクリスマスの原風景にたどり着けます。

②すべてを納める

神の御業とみことばを手繰りながら歩むマリヤが、そのときすべてを理解・納得できたわけではありません。疑問や不安、理解しがたいことがたくさんあったことでしょう。彼女は自分の感覚・知識で取捨選択せず、すべてを主からのものとして受け取ったのです。

③心の容量

前例や経験値があり、理解納得できることだけしか受け取らない傾向性が、私たちにはあります。そうすると私たちは新しい局面を受け入れることはかなり難しくなります。主は新しいことをなさると期待するなら、マリヤのように心の容量を広げるべきではないでしょうか。

III 思いを巡らして

①お仕舞にしない

忙しい時代に生きる私たちは、過去へ送る時、けりをつけて仕舞い込もうとします。マリヤはこれらのことを心に納めて終わりにしてはいません。出来事は過ぎ去り、言葉は消えます。しかし、心に納めたものは消え行かず、今も思い返すことができます。

②掌の中で

マリヤは、わかったこともわからないことも、継続して心の中で「これはどういうことなのだろう」と主と語り、熟考を重ねていました。昨日までわからなかったことが、今日の私には新しい意味をもって迫ってくるがあります。神の言葉を思い巡らす者の特権です。

③神が何をしようとしておられるのか

マリヤの思い巡らしのテーマは、出来事とことばの背後におられる神ご自身の御心です。人のことばと行動、その背後にある思惑や計画に私たちは目を留めがちですが、すべてを治める主が、何を願い、何をなさろうとされているのかを探るのが、信仰の営みです。

<おわりに> 2020年を、そしてこれまでのお互いの歩みを、多忙な中にあっても振り返りつつ、背後に働かれ、語ってくださる主を見出せる人は幸いです。その主が2021年も導かれます。主が一人一人に御言葉を与えて、主の道を思い巡らせ、辿らせてくださいますように。(H.M.)